

【1】 小学部の教育の基本的な考え方

(1) 小学部の教育でめざすもの

生後数分間を経た乳児でさえ、はや物を見ようとしたり、母親を探す動き、音（母親の声をたよりに）に敏感にしかも的確に反応しているといわれている。自己の生理的な欲求を満たすために動き運動をする。それと並行して外界の刺激にも正しく反応するようになり、感知弁別する判断力もついてくるといわれている。乳幼児期にあっては、運動が発達の基盤となっているといえる。

一般の子どもは、元気よく動きまわり夢中になって遊ぶ。一人遊びから友達との遊びへと遊びや動きは、複雑にしかも大きく広がっていくのが普通である。人と物を媒介にしていろいろな事柄に関心や興味をもつと同時に体もたくましくなり、将来にわたって生き抜く力を獲得していくのである。障害児における生き抜く力とは、障害の程度、能力に応じた自立を少しでもとげ、対人関係をできるだけ円滑にし、自己を素直に表現する能力を身につけ、可能な限り楽しい人生を送ることと考えている。

そこで、小学部の教育方針として「友だちの中で、よろこんで取り組む子」を目標にかかげて指導にあたっている。遊びや学習の中で意欲的に楽しく取り組みながら日常生活に必要な基本的なことがらを身につけさせることをねらっている。一般的に知恵遅れの子もたちは、運動能力にも劣り、ややもすると自己中心的で固執的になりやすい。その上、情緒が不安定であり、障害が二次的な障害をうみだし学校生活への適応もむずかしくさせている。遊びでも夢中になって遊ぶことができなかったり、他との関わりをもって遊ぶということが非常に少ないのが障害児である。このような児童の指導は、日常生活の中で起こる動きやことばに直接関わって、しかも、より具体的な内容でなければ自分のものとはならない。したがって、生活そのものを中心とした学習指導を生活単元学習、日常生活の指導、教科別の指導等々を教育課程の中に組み入れ指導している。また、より具体的な自然や社会とのふれ合いを多く持たせるために校外体験学習を組み入れて意欲と興味関心を育て豊かな感性を培うようにしている。障害児教育の基本は、個に適した指導で進めることになるが、集団の中で模倣したり、支え合って関わりをもって育ていくダイナミックな面も忘れることなく指導していくようにしている。

(2) 研究テーマと小学部の取り組み

① 小学部の教育でからだづくりの果す役割

精神薄弱というのは、単なる知恵遅れだけでなく、全体的な遅れである。量や程度の遅れでなく質的な遅れであるといわれている。これらは、からだの動きを通して発現するのであるから、欲求や指示に対して発達に適應した動きができるようになることは、それなりに知的な活動の発達も促進されていると考えたいのである。小学部におけるからだづくりとは、ひとりひとりの児童の動きの不自由さの軽減や障害の克服をめざしたものである。からだをつくることによって、日常の生活力の向上、学習する力、意志的活動の向上を見通したものである。これらは、将来の

社会生活を行う上での基礎となる力をつけた子どもとなるようめざすものであり、障害がどうであれ、発達に即した自然な動きができる子どもとなるように高めていきたいのである。

② からだづくりへ迫る指導法

児童がどの発達段階にあるか、どこにどのような欠落部分があるか実態把握し、それに基づいて適切な指導を展開するという道筋を進めた。実態把握の方法、内容については、以下別の部分で詳細は示す。初年度では、研究の構想図を作り、これに基づいた指導で有効であるとおもわれる方法として、ムーブメント教育の理論を中心にすすめることにした。

ムーブメント教育は、動くことを学ぶ、動きを通していろいろなことを学ぶという二つの能力を育てるもので、小学部のからだづくりの趣旨によくあっている。

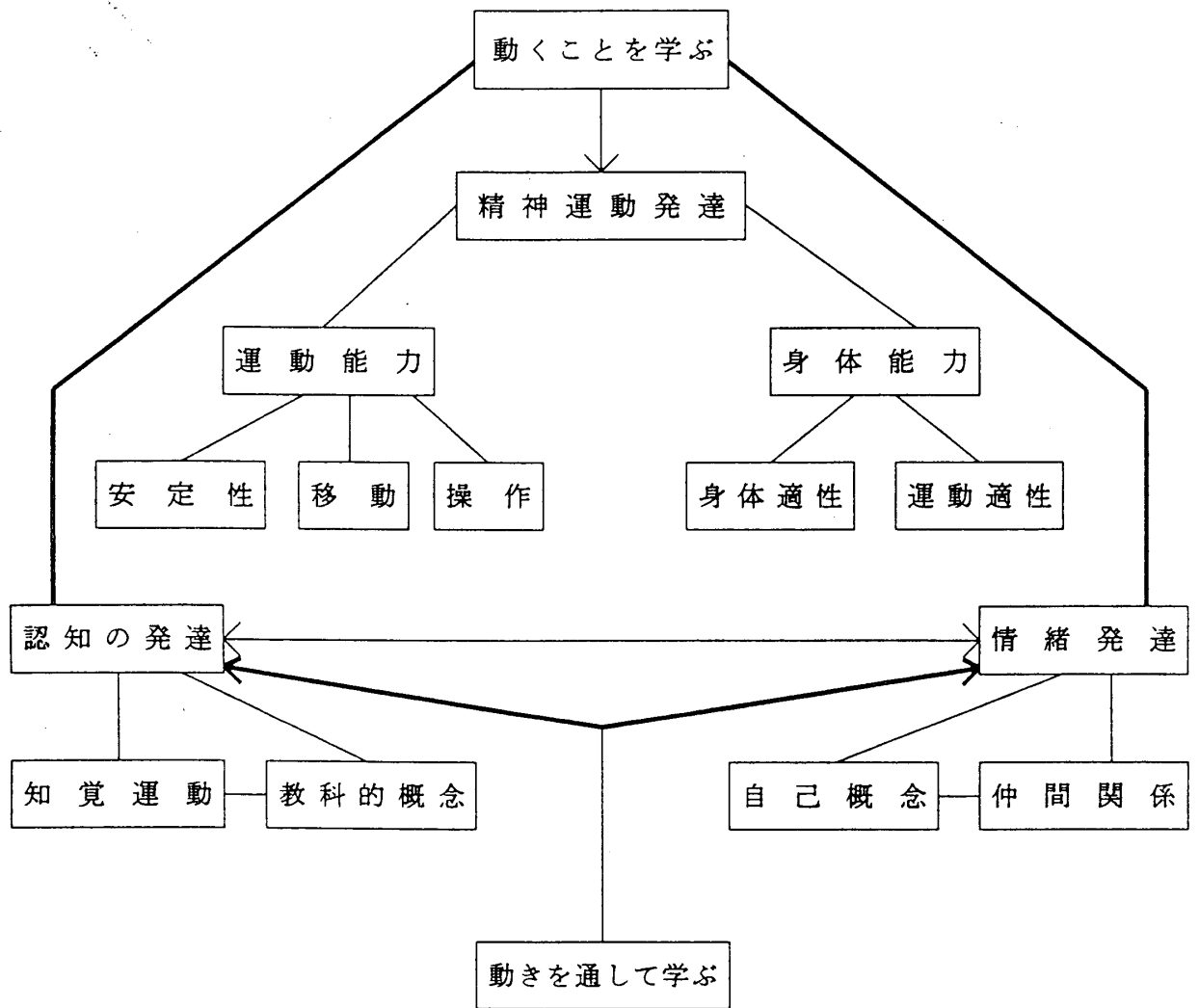


図1 ムーブメント教育でどのような諸機能が高められるか。
(小林芳文氏による)

「動くことを学ぶ」とは、主に精神運動発達を助長することであり、それには、運動能力（姿勢の安定性能力、移動能力、物の操作能力）や身体能力（健康な身体、調整力などの運動適性）が含まれている。「動きを通して学ぶ」とは、認知能力を助長すること、すなわち身体についての意識、周囲や空間の探求、認知能力や視・聴知覚運動能力と概念化などの文字や言語に通ずる教科的能力、情緒発達（自己概念の確立、仲間関係）を育てることである。単に身体的能力の高揚だけでなく、意志伝達能力や認知能力等の学習能力、対人行動能力等の発達も促進することをねらっている。

③ テーマの設定

学部テーマを設定するにあたっていろいろと案が出たが、基本的には子どもたちが意欲的にまた、楽しんで動いている姿にこそからだづくりは成立する。そのためには楽しい学習の工夫をしていかなければならないということを通理解し、最終的に「からだを動かすことを楽しむ子」と設定した。現時点では、どちらかといえば教師が主導権を持って、いろいろな動きを経験し動くことを楽しめるようにする。そのことによってからだを動かす喜びが分かってくる。この時点は楽しんでからだを動かすことをめざしていくという一番初期の段階である。しかし、そのことが目的ではなく、動くことを楽しむことによって、子どもたちが発達の基礎となる力を蓄えていくことを期待するものである。からだを動かすことを楽しむ子のテーマには、「からだを動かすことによって発達する力を蓄える子」の意味を含んでいる。将来的には、積極的にからだを動かす子ども（楽しんで動く子ども）へと変容していくことをねらっている。からだという言葉の中には、身体を動かす神経の支配、それをつかさどる脳の働き、行動を制御する内容も含めた意味合をもって使用している。

3年次としては、子どもたちが主体的に楽しんでからだを動かすための授業づくりを、リズム・サーキット、合同体育や生活単元学習で、遊び活動を通して取り組んでいる。